

海の恵み： 福江の漁業文化

島々を取り囲むごつごつとした溶岩は、サンゴやカイメン、海藻の森に適した隙間を作もたらし、それによって魚やサンゴ礁に生息する種が引き寄せられる。夏と秋には、チョウチョウウオのような熱帯の種が、暖かい季節に対馬海流の島々を訪れるため、浅瀬の生物の多様性が高まる。

アジア大陸の近くでは、ユーラシア大陸の流域より深い海域と冷たい海水によって、カンパチ、イワシ、イルカなどの種にとって、より快適な生息環境が形成される。さらに、福江の西側には外洋と沖縄トラフの深海があり、太平洋クロマグロやマッコウクジラなど、より大きな寒さを好む生物が生息している。

この豊かな海の幸に恵まれた福江では、沿岸漁業と漁船による漁業が地域社会にとって不可欠な食料源であった。また、彼らは地域独自の漁法を生み出した。

スケアン

スケアンは溶岩石で造られた潮干狩り用の仕掛けで、約 2500 年前に始まった。島民は狭い入り江に低い石垣を築く。満潮時には石垣は完全に水没するため、魚や他の食用生物が石垣の上を超えることができる。干潮時には水が引き、壁の高さより下に沈んで人工的な潮だまりが形成されるため、そこから網や手で簡単に魚を引き上げることができる。1940 年代になると、おそらく乱獲や海水温の上昇により罫にかかる魚が少なくなり、この漁法は廃れていった。最近、ボランティアの団体がこの伝統的な漁法を実演するために、三井楽半島のスケアンの修復に取り組んだ。

魚見

福江のもうひとつの伝統的な漁法は「魚見（うおみ）」と呼ばれるもので、文字通り「魚を見つける」という意味である。これは商業的な網漁の一種で、特に色濃い大型のクロダイが獲れることで有名な三陸の高崎市三井楽地区を中心に行われていた。この漁法は、湾の高い崖の上に座った鋭い目を持つ監視員と、入り江の入り口に張られた網が頼りだった。監視員は、魚の群れが入り江に入ってきたのを確認すると、旗で網を上げるように合図をし、魚を捕獲して自由に引き揚げることができるようにした。また、ボートに石を投げて近くの群れを湾に追い込むよう合図することもできた。この漁法を実践していた最後の漁業、2014 年に操業を停止したが、地元ではこの漁法を地域の文化遺産の一部として復活させるための取り組みが行われています。

鯨漁

現在では鯨漁は行われていないが、江戸時代（1603～1867 年）には福江で鯨漁が盛んに行われ、島の社会的・文化的発展に影響を与えた。有名な浮世絵師、北斎（1760-1849）も「千絵の海」シリーズで五島の捕鯨を描いている。

伝統的に鯨漁は海岸近くで行われていた。高い見晴らしの良い場所にいる鯨漁の監視員がクジラの居場所を突き止め、木造の小舟を集団で送り出し、その乗組員が手製の銚や網を使ってクジラを岸まで引きずり込んだ。クジラはその後、ほぼすべての部位が使用され、加工された。脂皮と皮は貴重

な油（ランプや石鹼として使用される）として、歯や骨は櫛やヘアピンなどに加工された。クジラのヒゲ
さえも文楽人形の糸として使われた。鯨肉は一般的な食べ物であり、現在では地元産のものはない
が、地元の特産品として残っている。1899 年、蒸気船と銚子を使用したノルウェー式の商業鯨漁が日
本に伝わり、鯨の捕獲数が大幅に増加したが、個体数に対する国際的な懸念により、1982 年に
商業捕鯨は一時停止された。4 世紀にわたって鯨漁が行われ、鯨漁によって食料、食糧、収入を
提供することができ、福江の多くの村々を支えてきた。